

南禅寺水路閣

京都府京都市左京区南禅寺福地町

鎌倉期開創の古寺の境内に、明治期の煉瓦造アーチ橋が縦貫する。臨済宗南禅寺派の大本山である南禅寺の琵琶湖疎水水路閣だ。

琵琶湖と京都を水路で結ぶという琵琶湖疎水の計画は江戸時代からあったが、始動する契機は1869(明治2)年の東京遷都だった。京都の地位、威厳の低下を懸念する声が高まったためだ。時の京都府知事・北垣国道が、上下水・水運・灌漑・製造機械の動力などを目的とした琵琶湖疎水を起案した。

主任技術者として招聘されたのは、後に近代日本の土木工学の祖と言われる田邊朔郎だ。当時、工部大学校(現・東京大学工学部)を卒業したばかりの田邊は、卒業論文「琵琶湖疎水工事の計画」で世界的に脚光を浴び、わずか21歳で同工事を担うことになる。着工は1885(明治18)年。煉瓦、材木といった資材も直営で生産し、ほぼ人力のみで5年後に完成させた。

水路閣は琵琶湖疏水の分線にある水路橋だ。田邊がデザインしたアーチ型橋脚の威風は、静謐な東山の景観と見事に融合している。およそ15年ぶりに訪れたカメラマンの西山芳一氏は、再び水路閣と対峙して呟いた。「130年前の構造物だが、たかだか十数年でも印象が変わる。時間の経過が古の土木構造物を核とした景観を磨いているようだ」。令和を迎えた明治期のインフラが境内の緑に囲まれ毅然と鎮座している。



今も現役の琵琶湖疎水は、竣工当時、上水道の確保はもとより、水力発電による産業の誘致にも寄与し、京都の町に活気を呼び戻した。全長93.2m、幅4m、高さ9mの水路閣は、ローマの水道橋を彷彿とさせる市指定の史跡だ。周辺には蹴上発電所やインクライン跡等も保存され、日本の土木黎明期の息吹を伝えている。

